

CCMC 2025

Contemporary Computer Music Concert

「多様性豊かなアコースマティック音楽の現在」
マルチ・チャンネル・スピーカー・オーケストラによる
アコースモニウム・コンサート

ワークショップ
レクチャー

2025年3月15日(土) 16日(日)
同志社女子大学京田辺キャンパス(京都)
頌啓館ホール K101/K123

主催：音と音楽創作工房 116

協力：MOTUS Compagnie Musicale

助成：公益財団法人かけはし芸術文化振興財団



〈プログラム / Program〉

@ 同志社女子大学京田辺キャンパス頌啓館 (〒610-0395 京都府京田辺市興戸)

@ Doshisha Women's College Kyotanabe Campus Shokeikan (〒610-0395 Kyotofu Kyotanabeshi Kodo)

3月15日(土)

13:00～ K112

レクチャー 1 / Lecture 1

講演者 / Speakers

L1-1 渡辺愛 / Watanabe Ai

「リュック・フェラーリ『逸話的なものたち』における作曲法」

Le processus de composition de Luc Ferrari dans Les Anecdotes

L1-2 森田信一 / Morita Shinichi

「創作環境の変遷」

L1-3 大久保雅基 / Ohkubo Motoki

「バーチャルとしてのオーディオ」

L1-4 かつふじたまこ / Katsufuji Tamako

「日用品オーケストラワークショップ～日用品で奏でる多様なオンガク」

14:00～ K112

ディスカッション 1 / Discussion 1

司会 / Moderator: 柴山拓郎/Shibayama Takuro

テーマ: 「アコースマティック・ミュージックの現在と未来」

15:00～ K123

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 1 / Acousmatic Music Live Concert 1

1-1 成田和子 / Narita Kazuko

「クジラの歌 / Chant de baleines」

1-2 渡辺愛 / Watanabe Ai

「印刷工場にて / À l'imprimerie」

1-3 落梟子 / Ochi Akiko

「Ground Zero 2024」

1-4 森田信一 / Morita Shinichi

「manjusaka」

16:00～ K123

公募入選コンサート A / Concert A Works selected by CCMC

A-1 ティモシー・モイヤーズ / Timothy Moyers

「On the Rim of Consciousness」 (演奏：渡辺愛)

A-2 ソフィア・マトウス・カンチーノ / Sofia Matus Cancino

「Saturno」 (演奏：大久保雅基)

A-3 エパメイノンダス・ファシアノス / Epameinondas Fassianos

「Echoes in Ascent / 昇華の響き」

A-4 ベルク・ヤグリ / Berk Yagli

「Transhuman」 (演奏：檜垣智也)

16:45～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 2 / Acousmatic Music Live Concert 2

2-1 由雄正恒 / Yoshio Masatsune

「雲悠々水潺々」

2-2 高橋哲男 / Takahashi Tetsuo

「Invisible Thing (Rework of Misteries of Modular +/- Mono-no-Aware Live Recordings)」

2-3 宮木朝子 / Miyaki Asako

「Folia Blue」

2-4 上野航 / Ueno Wataru

「平らかに溺れるための呼び水」

2-5 かつふじたまこ / Katsufuji Tamako

「となりに、いる / It Stay by You」

2-6 石上和寿也 / Ishigami Kazuya

「もう一つの日常のこと その2 / Another Everyday Things Part 2」

18:00～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 3 / Acousmatic Music Live Concert 3

3-1 足本憲治 / Ashimoto Kenji

「Colors of Fragments」

3-2 大久保雅基 / Ohkubo Motoki

「Fruit Carving」

3-3 坂野伊和男 / Banno Iwao

「infiltration」

3-4 高野大夢 / Takano Hiromu

「Music for a concert on Mercury」

3-5 ヴァンサン・ロブフ / Vincent Laubeuf

「D'un paysage à l'autre / ある風景から別の風景へ」 (演奏：高野大夢)

3月16日(日)

10:00～ K123

ワークショップとデモンストレーション「アコースモニウム演奏法」

Workshop & Demonstration 「Interpretation of Acousmonium」

檜垣智也 / Higaki Tomonari

12:45～ K112

レクチャー 2 / Lecture2

講演者 / Speakers

L2-1 大塚勇樹 / Ohtsuka Yuki

「音色の標本化とそれに基づく作曲スタイル」

L2-2 岡田智則 / Okada Tomonori

「電子音楽が生み出す付加価値について」

L2-3 檜垣智也 / Higaki Tomonari

「アコースモニウム演奏のストラテジー～ドニ・デュフルの新作を題材に」

13:30～ K112

ディスカッション 2 / Discussion2

司会/Moderator：柴山拓郎 / Shibayama Takuro

テーマ：「音と向き合うアコースマティック・ミュージックの創作の魅力とは？」

14:30～ K123

公募入選コンサート B / Concert B Works selected by CCMC

B-1 韓智 (カンチ) / Han Zhi

「乙女座 / Virgo」 (演奏：高野大夢)

B-2 ヨウ シイ / Yang Ziwei

「Echoing Cities / 響の都市」

B-3 楊萬可(ヨウ マンカ) / Yang Wanke

「口技 / Vocal mimicry」

B-4 テイ コクトウ / Ding Guodong

「不忍池の春」

B-5 王馨田 (オウ ケイデン) / Wang Xintian

「白昼夢 / Daydream」 (演奏：大久保雅基)

B-6 程玥媛 (テイ ゲツエン) / Cheng Yueyuan

「電気遊園地 / Denki Yuenchi (Parc d'amusement électrique)」

15:30～ K123

公募入選コンサート C / Concert C Works selected by CCMC

- C-1 小川拓人 / Ogawa Takuto
「生きる」

- C-2 大金駿介 / Ogane Shunsuke
「Celestial Sphere」

- C-3 秋山惟風 / Akiyama Ibuki
「走馬灯/Last flash back」

- C-4 花澤昴 / Hanazawa Subaru
「夢」 (演奏：檜垣智也)

- C-5 守谷悠吾 / Moriya Yugo
「イメージの翼」

- C-6 田中敬一 / Tanaka Keiichi
「molting stage/脱皮期」

16:30～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 4 / Acousmatic Music Live Concert 4

- 4-1 岡本久 / Okamoto Hisashi
「風の奏 / Kaze no Uta (the sound of the wind)」

- 4-2 林恭平 / Hayashi Kyohei
「THE KARAOKE」

- 4-3 長瀬元應 / Nagase Gen
「Fragments de lamentations / 嘆きにまつわる断章」

- 4-4 岡田智則 / Okada Tomonori
「古代都市 / Ancient Capital」

- 4-5 牛山泰良 / Ushiyama Taira
「鳴動するは打物」

17:30～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 5 / Acousmatic Music Live Concert 5

5-1 檜垣智也 / Higaki Tomonari

「音楽の石 / Pierre musicale」

5-2 大塚勇樹 / Ohtsuka Yuki

「Fragmentary Passage (refrain)」

5-3 渡邊裕美 / Watanabe Hiromi

「Larmes d'Astrée / アストライアの涙」

5-4 田代啓希 / Tashiro Hiroki

「ななつ星」

5-5 葛西聖憲 / Kasai Masanori

「Étude 2025」

5-6 ドニ・デュフル / Denis Dufour

「L'Ivre d'avril op. 121 / 四月の酔い op. 121」

「Treffpunkt op. 193 / 待ち合わせ場所 op. 193」 (演奏：檜垣智也)

両日

インスタレーション / Installation

1. 岡本久 / Okamoto Hisashi

「Installation - 202503」

2. 平野砂峰旅 / Hirano Saburo

「Atmospheric Sound」

3. 電子音響ピープルプロジェクト / Denshi Onkyo People Project

「Denshi Onkyo People Project 2023-2024 Report」

〈解説 / Explanation〉

3月15日（土）

13:00～ K112

レクチャー 1 / Lecture 1

講演者 / Speakers

L1-1 渡辺愛 / Watanabe Ai

「リュック・フェラーリ『逸話的なものたち』における作曲法」

Le processus de composition de Luc Ferrari dans Les Anecdotes

L1-2 森田信一 / Morita Shinichi

「創作環境の変遷」

L1-3 大久保雅基 / Ohkubo Motoki

「バーチャルとしてのオーディオ」

L1-4 かつふじたまこ / Katsufuji Tamako

「日用品オーケストラワークショップ～日用品で奏でる多様なオンガク」

14:00～ K112

ディスカッション 1 / Discussion 1

司会 / Moderator：柴山拓郎/Shibayama Takuro

テーマ：「アコースマティック・ミュージックの現在と未来」

15:00～ K123

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 1 / Acousmatic Music Live Concert 1

1-1 成田和子 / Narita Kazuko

「クジラの歌 / Chant de baleines」

作品解説：アコースマティック音楽の作曲において、まず何と言っても、素材となる音を集めることが必要で、それが作品の個性となるのが重々わかっているのだが。素材選びや録音は重要だと自分に言い聞かせながら、いつも使い古した音や手軽な素材に頼ってしまい、後に後悔する。今回は思いがけない幸運に恵まれた。フランスのグランゼコールの一つである Ecole des Mines de Paris（パリ国立高等鉱業学校）との共同制作となる作品（映像、電子音響と器楽アンサンブルのため）の初演が11月にあり、それを作っている最中である。海洋生物の発する音や鳴き声を、電子音響のパートには用いることが条件となっており、海洋研究者 Hervé Glotin の集音によるさまざまなサウンド・ファイルが送られてきた。どれも音楽的に興味深い音であるが、出会ったことのない周波数やビット数のファイルで、ノイズ除去やイコライザー処理に苦勞している。今回、クジラの鳴き声を用いた短編を作ってみた。クジラの住処である海洋は人間による汚染が進み、クジラの悲鳴が聞こえてくるようである。

プロフィール：1997年から電子音響音楽のコンサートの開催に携わっている。電子音響音楽作品のほか、オペラ、管弦楽曲や室内楽、邦楽作品など多数の作品を作曲、内外で演奏されている。同志社女子大学学芸学部音楽学科特任教授。

9月13日（土）に頤啓館ホールで、ハイブリッドオペラ「テセウス」の試演を行います。聴きにきてください。

1-2 渡辺愛 / Watanabe Ai

「印刷工場にて / À l'imprimerie」

作品解説：2020年11月に長野県松本市にある藤原印刷という印刷会社を訪ね、工場の中をフィールドレコーディングした。大型の機械がいくつも稼働し、どんなシンセサイザーでも出せない大迫力のサラウンドに圧倒された。東京に帰り、時間が経ってから録音された音を聴くと、リアルで感じた迫力よりも工場見学の思い出と重なって機械のビートがどこか懐かしいものを感じられた。工場にある専用のループで覗いた印刷物の網点は規則正しく、裸眼で見た印刷物とはまるで別世界が広がっていたことも思い出に残っている。ピアノの即興を重ねて、時間感覚の倍率を広げるようにデザインした。2021年作曲。2022年5月1日にJ-WAVE RADIO SAKAMOTOで放送された。

プロフィール：作曲・アコースモニウム演奏・即興活動を行う。東京音楽大学大学院修了後に渡仏、パリ国立地方音楽院を経て東京藝術大学大学院修了。リュック・フェラーリ研究で博士号取得。現在、昭和音楽大学、東京藝術大学、武蔵野美術大学、玉川大学非常勤講師。美学校講師。日本電子音楽協会理事。ACSMI16運営委員。JAPAN2011受賞（イタリア）・ICMC2018入選（韓国）、FUTURA（フランス）やNIT（スペイン）等音楽祭での上演、France Musique（フランス）・現代の音楽（NHK）・RADIO SAKAMOTO（J-WAVE）での放送など、国内外で評価を得る。<https://aiwatanabe.tumblr.com/>

1-3 落梟子 / RAKASU PROJECT. OCHI Akiko/RAKASU PROJECT.

「Ground Zero 2024」

作品解説：かつて、私の祖父母が昭和40年代頃住んでいたアパートは、広島市の原爆ドームにほど近い「島病院」の隣にあった。その病院の真上で、世界で初めて原子爆弾が炸裂したと言われており、多くの観光客が訪れるスポットとなっている。幼少期、私にとって原爆ドームや平和祈念公園は楽しい遊び場であり、大人になってからは、ほど近い勤務先へ通う通勤ルートでもあった。祖父母との楽しく幸せな思い出に満ちていたその場所は、私にとってあまりにも身近な場所であったせいか、それがまさに「グラウンド・ゼロ（爆心地）」と呼ばれる場所である、ということに気づいたのは、私が広島を離れ、被爆建造物も被爆樹木も無い京都に住み始めたここ数年のこと。この作品には、広島市平和祈念公園と、爆心地の碑の前でフィールドレコーディングを行い採取した音を使用している。幼少期の懐かしい場所での記録であると同時に、「ヒロシマ」と向き合う試みでもある。

プロフィール：広島県福山市生まれ、京都市在住。広島大学大学院学校教育研究科音楽教育修了。電子音響音楽などの実験的音楽制作、商業音楽制作、各種センサーを活用したパフォーマンスや、サウンドインスタレーション制作などを手がけている。現在、京都精華大学メディア表現学部教授。

1-4 森田信一 / Morita Shinichi

「manjusaka」

作品解説：創作において考えていることは、抽象的な音楽。あらゆる音を対象として、その中から素材を選び出す。それを加工し、組み立てていくことになります。多様な可能性があり悩むところです。時間的な展開も大きな関心となります。時間軸の上、時間の流れの中で、どう進んでいくか。これはいろいろなアイデアがあると思いますが、難しい問題です。

プロフィール：東京理科大学で物理学を学ぶ。江崎健次郎主宰の音響デザイナー協会に加わったことから、“音展”（音の展覧会）での活動で、1973年から1979年まで電子音響作品を発表。東京学芸大学大学院で作曲と音楽教育学を学ぶ。作曲グループ“パッケージ21”（1984～1990）その他で器楽作品を発表。CCMCその他で電子音響音楽を発表。作曲家協議会会員。

16:00～ K123

公募入選コンサート A / Concert A Works selected by CCMC

A-1 ティモシー・モイヤーズ / Timothy Moyers

「On the Rim of Consciousness」 (演奏：渡辺愛)

作品解説：I loosely based 「On the Rim of Consciousness」 on the following question: What would it sound like if we were able to place a microphone in your mind, capturing the sounds of dreams, fragmented memories, conflicting emotions, even the synapses firing in your brain?

「On the Rim of Consciousness」は、次のような問いに基づいている：夢の音、断片的な記憶、葛藤する感情、脳内で発火するシナプスの音さえも捉えることができるとしたら、どんな音がするだろうか？

プロフィール：Timothy Moyers Jr. is a composer and audiovisual artist originally from Chicago. He is currently an Assistant Professor of Music Theory and Composition at the University of Kentucky, where he also directs the Electroacoustic Music Studio. Prior to joining the University of Kentucky, Timothy was an Assistant Professor in the Department of Human Centered Design at IIIT-D (Indraprastha Institute of Information Technology), Delhi, India, where he founded and directed ILIAD, the Interdisciplinary Lab for Interactive Audiovisual Development, and initiated the GDD Lab (Game Design and Development Lab). He completed his PhD in Electroacoustic Composition from the University of Birmingham (England), an MM in New Media Technology from Northern Illinois University (USA), and BAs in Jazz Performance and Philosophy from North Central College (USA).

ティモシー・モイヤーズ・ジュニアはシカゴ出身の作曲家、オーディオビジュアル・アーティスト。現在、ケンタッキー大学で音楽理論・作曲の助教授を務め、電子音響音楽スタジオの指導にもあたっている。ケンタッキー大学以前は、インドのデリーにある IIIT-D (インドラプラスタ情報工科大学) の人間中心デザイン学科で助教授を務め、ILIAD (Interdisciplinary Lab for Interactive Audiovisual Development) を設立・指導し、GDD ラボ (Game Design and Development Lab) を立ち上げた。バーミンガム大学 (英国) で電気音響作曲の博士号を、ノーザン・イリノイ大学 (米国) でニューメディア・テクノロジーの修士号を、ノース・セントラル・カレッジ (米国) でジャズ・パフォーマンスと哲学の学士号を取得。

A-2 ソフィア・マトゥス・カンチーノ / Sofia Matus Cancino

「Saturno」 (演奏：大久保雅基)

作品解説：「Saturno」 is an acousmatic work inspired by Francisco de Goya's painting "Saturno devorando a su hijo". Using algorithmic composition, the sounds are presented and deconstructed by their original signal.

「Saturno」は、フランシスコ・デ・ゴヤの絵画「Saturno devorando a su hijo」にインスパイアされた音響作品である。アルゴリズムック・コンポジションを使い、音は元の信号によって提示され、分解される。

プロフィール：Sofia Matus Cancino (b.1994) is a composer and digital artist interested in visual music, embodied sound, and algorithmic composition. Matus studied piano at the Conservatory of Music of the State of Mexico (COMEM, 2007-12). She graduated with honors from both the B.A. in Digital Art (UAEMEX, 2012-17) and the M.A. in Music Technology, at the National Autonomous University of Mexico. (UNAM, 2020-22). Her work has been showcased at several contemporary music and visual art festivals such as SEAMUS, No-doCCS, Sound:Frame, and Visiones Sonoras among others. Currently, she is a Doctoral Candidate and a Teaching Assistant at Arizona State University, where she holds a Presidential Graduate Assistantship.

ソフィア・マトゥス・カンチーノ (1994 年生まれ) は、ヴィジュアル・ミュージック、身体化されたサウンド、アルゴリズムックなコンポジションに関心を持つ作曲家、デジタル・アーティスト。メキシコ音楽院 (COMEM、2007-12 年) でピアノを学ぶ。メキシコ国立自治大学デジタルアート科 (UAEMEX、2012-17 年) と音楽テクノロジー科 (M.A.) を優秀な成績で卒業。(UAM、2020-22 年)。彼女の作品は、SEAMUS、No-doCCS、Sound:Frame、Visiones Sonoras などの現代音楽とビジュアル・アートのフェスティバルで紹介されている。現在、アリゾナ州立大学で博士課程候補生およびティーチング・アシスタント。

A-3 エパメイノンダス・ファシアノス / Epameinondas Fassianos

「Echoes in Ascent / 昇華の響き」

作品解説: "Echoes in Ascent" explores the transition from chaotic mechanical sounds to musical structures, utilizing a conceptual "order formation" process. At the core, pitched resonance transforms complex airplane recordings, revealing harmonic layers within chaotic soundscapes. By merging recordings of water, stones, piano, strings, electric and classical guitars, the piece bridges technological and natural sounds, suggesting their interconnectedness. This transformation occurs through two compositional methods: first, by using pitched resonance to reveal the inherent musicality of mechanical sounds; second, through "micromelodies" performed by tonal instruments, evoking nostalgia often felt during flight. These melodies both echo the chaotic tones and symbolically shape them, creating a reflective ambient layer. Ultimately, "Echoes in Ascent" invites listeners into an immersive soundscape, where technology and nature exist in a unified sonic dialogue, resonating harmoniously within a single auditory space.

"Echoes in Ascent" は、概念的な "秩序形成" プロセスを用いて、混沌とした機械音から音楽構造への移行を探求する。核となるのは、ピッチド・レゾナンスが複雑な飛行機の録音を変化させ、混沌としたサウンドスケープの中にあるハーモニーの層を明らかにすることである。水、石、ピアノ、弦楽器、エレクトリック・ギター、クラシック・ギターの録音を融合させることで、この作品は技術音と自然音の架け橋となり、それらの相互関係を示唆している。この変容は、2つの作曲方法によって起こる。1つ目は、機械音に内在する音楽性を明らかにするためにピッチド・レゾナンスを用いる方法、2つ目は、飛行中にしばしば感じるノスタルジアを呼び起こす、調性楽器による「マイクロメロディー」である。これらのメロディーは、混沌とした音色を反響させると同時に、それを象徴的に形作り、反射的なアンビエント層を作り出している。最終的に、"Echoes in Ascent" は、テクノロジーと自然が統一された音の対話の中に存在し、ひとつの聴覚空間の中で調和して響き合う、没入感のあるサウンドスケープへとリスナーを誘う。

プロフィール: Dr. Epameinondas P. Fassianos, also known as Epa Fassianos, is a Greek composer specializing in electroacoustic and ambient music. Born in Athens in 1982, he studied Music Technology (MA) at the University of York and Composition for Media and Film (MA) at the University of Sussex, also completing his MPhil in Musical Composition under Professor Ed Hughes. Fassianos earned his PhD in Acousmatic Music Composition from the NOVARS Research Centre at the University of Manchester, under Professor David Berezan. His research focuses on the integration of Greek cultural elements, including mythology, religion, and traditional instruments, into acousmatic compositions. An award-winning composer, Fassianos's Chromatocosmos received first prize at MUSICA NOVA 2018, and ElectroSantouri received an honorary mention at the ARS Electronica Forum Wallis in 2019. He is a member of multiple international music associations, including the Hellenic Association of Electroacoustic Music Composers, ICMA, JSSA, and SEAMUS.

エパ・ファシアノスとしても知られるエパメイノンダス・P・ファシアノス博士は、電子音響音楽とアンビエント・ミュージックを専門とするギリシャの作曲家。1982年アテネ生まれ。ヨーク大学で音楽技術（修士）、サセックス大学でメディアと映画のための作曲（修士）を学び、エド・ヒューズ教授の下で作曲の修士課程も修了。マンチェスター大学 NOVARS 研究センターにて、デイヴィッド・ベレザン教授のもとで音響音楽作曲の博士号を取得。神話、宗教、伝統楽器など、ギリシャの文化的要素をアコースティック音楽に取り入れることを研究テーマとしている。受賞歴のある作曲家であり、Fassianos の Chromatocosmos は MUSICA NOVA 2018 で一等賞を受賞し、ElectroSantouri は 2019 年に ARS Electronica Forum Wallis で名誉賞を受賞した。Hellenic Association of Electroacoustic Music Composers, ICMA, JSSA, SEAMUS など複数の国際音楽協会のメンバーでもある。

A-4 ベルク・ヤグリ / Berk Yagli

「Transhuman」 (演奏：檜垣智也)

作品解説：As technology improves at a rapid rate, promising a change in the way of living and even the essence of what is human (for the human species to be able to catch up with artificial intelligence), it is now more than necessary to ask if as a species are we ready for a radical and possibly an irreversible jump? The Transhuman trilogy, consisting of three electroacoustic metal hybrid pieces, focuses on finding certain methods to create balanced hybrid pieces with the aesthetic of dystopian futurism. The main aim behind this form of hybridity is to create hybrid pieces which have aggressiveness, heaviness, and darkness of metal mixed with endless timbral possibilities, and abstractness of electroacoustic music. 'Transhuman' being the first of the trilogy of pieces, this piece is all about experiencing the singularity process when every single consciousness in the world is mixed with the artificial consciousness.

テクノロジーが急速なスピードで進歩し、生き方や人間らしさ（人工智能に人類が追いつくこと）の本質の変化さえも約束される中、私たちは種として、急進的でおそらくは取り返しのつかないジャンプをする準備ができているのだろうか？3つの電子音響メタル・ハイブリッド作品からなる「トランスヒューマン」3部作は、ディストピア的未来主義の美学を備えた、バランスの取れたハイブリッド作品を創り出すためのある方法を見つけることに焦点を当てている。このハイブリッドの主な目的は、メタルのアグレッシブさ、ヘヴィネス、ダークさと、電子音響音楽の無限の音色の可能性、抽象性をミックスしたハイブリッド作品を作ることだ。Transhuman」は3部作の最初の作品であり、世界中のあらゆる意識が人工意識と混ざり合うシンギュラリティのプロセスを体験することをテーマにしている。

プロフィール：Berk Yağlı (born 1999) is a Cypriot guitarist, composer, and producer. His mission with his music has been to talk about social, political, and philosophical matters interestingly to invite the listeners into reflecting on the topics. He has been active in the UK since 2017. His works have been presented internationally. He is regularly invited to compose his music in studios throughout the world. He received numerous awards for his compositions in competitions around the world.

キプロスのギタリスト、作曲家、プロデューサー。彼の音楽における使命は、社会的、政治的、哲学的な事柄について興味深く語り、リスナーをそのトピックについての考察へと誘うことである。2017年より英国で活動。彼の作品は国際的に発表されている。世界中のスタジオに定期的に招かれ作曲を行う。世界中のコンクールで数々の賞を受賞。

16:45～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 2 / Acousmatic Music Live Concert 2

2-1 由雄正恒 / Yoshio Masatsune

「雲悠悠水潺潺」

作品解説：この曲は、「間」をテーマとした一連の作品の中の一つとして、電子音響作品として作曲されたものである。5作目。兎角世の中というのは蠢めいていて休む暇なし。

—中略—

音楽では音が鳴らない箇所は休符、休符は休むものではない、ということ禅問答のようなことがある。

—中略—

この禅問答のような捉え方はいかにも日本美学のように思う。

—中略—

間、

この言葉というのはとても感慨深いものである。

—中略—

ありのままの姿。

初心を忘れないために。

・・・

結びは、まだ無し。

プロフィール：神戸出身。作曲家、メディアマスター No.75。コンピュータによる芸術作品の創作を専門とし、アルゴリズム・コンポジション、音響合成、ライブエレクトロニクス、メディア表現を題材にした創作研究を行っている。電子音響作品は、国内外 (ICMC-国際コンピュータ音楽会議、Contemporary Computer Music Concert, FUJI acousmatic music festival, MUSICACOUSTICA-BELJIN, Festival FUTURA 等) において演奏される。昭和音楽大学作曲学科、IAMAS アートアンドメディア・ラボ科を卒業。日本作曲家協議会、日本音楽即興学会、情報処理学会音楽情報科学研究会会員、先端芸術音楽創作学会運営委員、日本電子音楽協会理事、昭和音楽大学准教授。

2-2 高橋哲男 / Takahashi Tetsuo

「Invisible Thing (Rework of Misteries of Modular +/- Mono-no-Aware Live Recordings)」

作品解説：The things that are seen are temporary, but the things that are unseen are eternal. ニーチェやキルケゴール研究者として知られる和辻哲郎は、宣長の説いた「もののあはれ」論に触れて、「もののあはれをしる」という無常観的な哀愁の中には、「永遠の根源的な思慕」あるいは「絶対者への依属の感情」が本質的に含まれているとも解釈している 2025 年 1 月 12 日 Misteries Of Modular +/- 物の哀れ vol.1 ライブレコーディングの再構築。

プロフィール：仙台在住 身体性とテクノロジーをテーマに max/msp などのプログラミングやモジュラーシンセをはじめチェロ、ベースの即興演奏、「アークスモニウム」作品の発表、プロジェクションマッピングの楽曲を提供を行う。近年はモジュラーシンセをメインに都内中心にライブ活動を行う。2024 年 都内を中心としたモジュラーシンセ奏者によるモジュラーシンセ コンピレーション CD に参加。DOMMUNE 出演を果たす。即興ノイズ弦楽器ユニット corps sans Organe やアンビエント即興ユニット Jai Machine(Shrine.jp, 涼音堂茶舗、beta bodega)などでライブ活動、作品発表を行っている。長尺曲、実験音楽のネットレーベル Nord Perdu Edition 主宰 地元仙台のマシンライブ・モジュラーシンセにフォーカスしたイベント「Patch Me」オーガナイザー。

2-3 宮木朝子 / Miyaki Asako

「Folia Blue」

作品解説：万華鏡映像、フルドーム映像作家の馬場ふさこさんによって遺された未完の映像のための音響フラグメント。一千年の木が生い、モルフォ蝶が舞う青の物語は終わりのない場所に変わった。

プロフィール：現代音楽を起点に映像・香り・身体・特異な場などと関係性を結ぶ音響制作とその空間展開、奄美群島の聖地でのサウンドインスタレーション、国立天文台の 3D 映像や国際芸術祭の光のインスタレーション、感覚ミュージアム常設インスタレーションのための音楽制作、コニカミノルタ・プラネタリア東京における 22.2ch 空間音響作品制作などを行う。第八回現代音楽協会作曲新人賞入選、ICMC2016、NYCEMF2019 入選。5.1ch サラウンド音楽作品によって「坂本龍一|設置音楽展コンテスト」最優秀賞、没入型フルドーム映像（映像・馬場ふさこ）とサラウンド音楽の作品によって第 9 回国際科学映像祭ショートフィルム部門最優秀賞、International fulldome festival にて Best Art Show Prize 受賞 <https://www.te-pito-records.com/asakomiyaki>

2-4 上野航 / Ueno Wataru

「平らかに溺れるための呼び水」

作品解説：この作品は、過去のフィールドレコーディング素材を色々聞き返したり、DAW 上で並べ替えたりする中で喚起されるものに従って出来上がったものです。今回はあまり過激なエフェクトや編集を用いず、シンプルな配置やミックスになりました。何らかの意図やコンセプトを反映させたり、私自身を表現しようとしたものではありません。通り過ぎるように聴いてもらえれば幸いです。

プロフィール：大阪芸術大学 音楽学科卒 同志社女子大学 非常勤講師
活動：尺八演奏、電子音響音楽の制作など

2-5 かつふじたまこ / Katsufuji Tamako

「となりに、いる / It Stay by You」

作品解説：そこにも、いる。

プロフィール：音作家。90 年代半ばより詩や言葉を用いた音作品の制作を始める。2000 年フランス国立視聴覚研究所 INA-GRM にて作曲を、2005 年 FUTURA フェス（フランス）にてアークスモニウム演奏を学ぶ。何気ない日常から小さな奇跡（音）を拾い集め、紡ぎ出されるその作品は、日常の隣のちょっとへんてこな世界を表現する。一方、鍵盤ハーモニカやビー玉、ペットボトルなどの日用品で奏でる繊細な生音と、エレクトロニクスを融合したライブ演奏でも唯一無二の音世界を作り出す。フランス他ヨーロッパ各地やニューヨークでの作品上演、Motus（仏）からの作曲委嘱、パリ、ベルリンでのライブ演奏、バンコクでのパフォーマンスアートフェスへの参加など、活動は世界へも広がっている。また、日用品を使つての音探しや合奏を行う「日用品オーケストラ」ワークショップも展開中。作品は、<https://tamakokatsufuji.bandcamp.com> にて、ご視聴、ご購入いただけます。

2-6 石上和寿也 / Ishigami Kazuya

「もう一つの日常のこと その2 / Another Everyday Things Part 2」

作品解説：いくつもの世界は同時に存在し、それぞれの世界の中で人々は日常を生活している。それぞれの日常にある無数の現実、流れる水のように変化している。現実の変化と共に、日常の音は無常の中に溶けていく。

2025年2月制作。

プロフィール：石上加寿也 KAZUYA ISHIGAMI 1972年大阪生まれ。作曲家、即興演奏家。幼児期からテープレコーダーで遊びながらカットアップ・コラージュ風の作品を作り始める。1992年からソロライブ活動およびテープ音源リリースを開始。1994年からコンピュータと音楽プログラミング言語 Max を使用したライブ演奏および作品制作をはじめ。1997年フランス INA-GRM での夏季アトリエに参加。DR(ドイツ公共放送)での委嘱作品をはじめ、WDR(西部ドイツ公共放送)、MUSLAB 国際電子音響祭(メキシコ)、Zeppelin 国際サウンドアート電子音響音楽祭(スペイン)、ICMC 国際コンピュータ音楽会議 2015(アメリカ/テキサス)、Music From Japan 2020(アメリカ/NY)などで作品上演をおこなう。自主レーベル NEUS-318 と OMODARU を主宰。

18:00～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 3 / Acousmatic Music Live Concert 3

3-1 足本憲治 / Ashimoto Kenji

「Colors of Fragments」

作品解説：音の仕草、というものに長く興味を持っています。いわゆる「五線紙の音楽」におけるそれと電子音響音楽におけるそれは、結局のところ共通して「音高」に多くを支配されるのか？といった興味です。その点に少し偏った作品となりました。

プロフィール：創作活動のほか、映画・TV、コンサートにおける編曲をしばしば担当。中学校の音楽教科書には編曲作品が複数採用されている。全幕の編曲を担当したオペラ《オルフェオとエウリディーチェ》では三菱 UFJ 信託音楽奨励賞を受賞。最近の作品・仕事としては、吹奏楽曲『Kicky Game』(WAKO Records)、フルート独奏曲『Bocce』(Daiki sound)、NHK 連続テレビ小説『おかえりモネ』、TV-CF『いち髪』など。現在、国立音楽大学准教授。

3-2 大久保雅基 / Ohkubo Motoki

「Fruit Carving」

作品解説：当たり前が続いていくと思っていたものが、突然中断することがある。私の住む宮城県仙台市もここ十数年を振り返れば、東日本大震災によって、新型コロナウイルスの緊急事態宣言によって、街の機能は突然停止した。ここには継続—中断の関係があり、中断と認識するには、その前の継続の状態が必要である。そしてその先にあるのは変化である。それ以前とは異なる状態となって新しい継続を生む。中断の以前に継続していたものが再度現れたとしても、中断というイベントが爪痕を残すため、これまでのものとは接続することはできない。本作のテーマは「継続—中断」である。これは作曲上の構成にも適用されており、そのイベントが連続性に変化を与える。主に仙台駅周辺で録音された音が使われている。日本の都市の音を知っている人であれば聞き馴染みのある様々な音が登場するだろうが、それらが中断によって様相を変える。

プロフィール：コンピュータ音楽の作曲家。テクノロジーと音楽の関係を創作、文化の面から見直すことで、オルタナティブな創作を行う。愛知淑徳大学、相愛大学非常勤講師。洗足学園音楽大学 音楽・音響デザインコースを卒業。情報科学芸術大学院大学[IAMAS]メディア表現研究科 修士課程修了。Contemporary Computer Music Concert 2010 にて ACSM116 賞、Wired Creative Hack Award 2019 にて Sony 特別賞を受賞。ARTE PUBLICA E METAVERSO 2023 にて現代音楽部門3等賞を受賞。杭州国際電子音楽祭 2024 Electroacoustic Music Composition Competition ファイナリスト。先端芸術音楽創作学会、日本 AI 音楽学会、日本電子音楽協会会員。ACSM116 運営委員。

3-3 坂野伊和男 / Banno Iwao

「infiltration」

作品解説：いくつかの音をそれぞれ独立に規則的・不規則的に繰り返すと、それらが重なったり前後にずれたりする。そこに音が戯れているかのような、揺れる鎖のような、震えのような、リズムとは少しばかり違う感覚を覚えた。そんな関係がうまく構成できたらいいな、などと考えながら作ってみた。

プロフィール：1959年 愛知県生まれ。九州芸術工科大学 芸術工学部 音響設計学科 卒業。同大学院 修了。1986年 NHK 日本放送協会入局。主にドラマ、音楽のミキシングに30数年間従事。CCMCには公募も含め2012年から参加している。ボンクリ2023「電子音楽の部屋」出展。Festival Futura 2024出展。

3-4 高野大夢 / Takano Hiromu

「Music for a concert on Mercury」

作品解説：もともと本作は水星でのコンサートのために書き始められたわけではなかった。とても私的な動機に基づいていたし、いつか発表できればいいくらいに思っていた。そして書き進めていくうちに、やはり本作が私的であり、自身の居場所を自ら確かめるような作品であることを確信したのだった。「ボクハココニイル」のどと。ところで水星には振動を餌にする生物がいるらしい。彼らは半透明の小さな菱形をしており、洞窟に住み、感覚は触覚しかなく、微弱なテレパシー能力を持っているそうだ。私は、極めてパーソナルな本作こそ彼らに養分として捧げるのにうってつけではないかと思った。なぜなら彼らがテレパシーでやりとりするたった2つのメッセージのうちの1つが「ボクハココニイル」だからだ。今はまだ地球、日本、京都だけれど、いつか水星で上演される際には本作が彼らの生きる糧となることを願っている。

プロフィール：山梨県出身。山梨大学大学院教育学研究科修士課程修了。東京電機大学大学院先端科学技術研究科博士課程在籍。作品は Contemporary Computer Music Concert (CCMC)、International Computer Music Conference (ICMC)、Seoul International Computer Music Festival (SICMF)、Espacios Sonoros など、国内外のコンサートや音楽祭にて上演されている。音響エンジニア、アコースモニウムの演奏者としても活動し多くの作曲家の作品上演に携わる。日本音楽表現学会会員、日本電子音楽協会会員、音と音楽・創作工房116 運営委員。

3-5 ヴァンサン・ロブフ / Vincent Laubeuf

「D'un paysage à l'autre / ある風景から別の風景へ」2025 初演 (演奏：高野大夢)

作品解説：この音楽は、池が点在するフランスのドンプ地方特有のサウンドスケープから、ラテンアメリカの熱帯雨林に似た環境（ただしリヨンの動物園で録音されたもの）へと私たちを誘う。作品中、人工的な電子音で構成されたエピソードでは、穏やかで心落ち着く場所から出発し、通過するにつれて、それが破壊されて行く。その後、再び自然な雰囲気に変わるが、より暴力的で荒々しい雰囲気へと変化を遂げる。「ある風景から別の風景へ」は、私たちが引き起こし、しかし最終的にはコントロールすることのできない変容の寓話と見るべきだろう。

プロフィール：器楽作品、電子音響音楽作品の作曲家、インスタレーション・デザイナー、そして即興演奏家であり、芸術監督として音にまつわる幅広い活動に携わっている。それらの経験からの異なる「視点」からアイデアを探求している。Ina-GRM、Muse en Circuitのスタジオに招聘され、l'Instant donné、Court-Circuit またはL'ONCEIMなどのアンサンブルのために作曲している。フランスと海外（北京、東京、ニューヨーク、ジュネーブ、ウィーン）で演奏された作品は100を超える。電子音響音楽のミュージシャンとして、いくつかの日本ツアーに参加。また、秋の音楽祭-festival d'Automne（バステューユオペラ劇場、サン・ドニのTGP CDN）では、L'Instant donnéとMotusと共に、カールハインツ・シュトックハウゼンの「Kontakte」の電子音響パートを演奏した。2008年にはla Muse en Circuit主催の第8回リュック・フェラーリ国際コンクールに入賞。CDのリリースは、2011年にMotusから『Raréactions』、2013年にObs*（ロシア）とOto（日本）から『The Poetics of Vacuum』、2019年にArtsonique & Motusから『...on ne sait pas』がある。2007年からはla compagnie musicale Motus（パリ）とfestival Futura（クレ、ドローム県）の芸術監督を、2021年からはヴィルールバヌの国立音楽学校で電子音響音楽の作曲の教授を務めている。

3月16日(日)

10:00～ K123

ワークショップとデモンストレーション「アコースモニウム演奏法」
Workshop & Demonstration 「Interpretation of Acousmonium」
檜垣智也 / Higaki Tomonari

12:45～ K112

レクチャー 2 / Lecture2

講演者 / Speakers

L2-1 大塚勇樹 / Ohtsuka Yuki

「音色の標本化とそれに基づく作曲スタイル」

L2-2 岡田智則 / Okada Tomonori

「電子音楽が生み出す付加価値について」

L2-3 檜垣智也 / Higaki Tomonari

「アコースモニウム演奏のストラテジー～ドニ・デュフルの新作を題材に」

13:30～ K112

ディスカッション 2 / Discussion2

司会/Moderator: 柴山拓郎 / Shibayama Takuro

テーマ: 「音と向き合うアコースマティック・ミュージックの創作の魅力とは?」

14:30～ K123

公募入選コンサート B / Concert B Works selected by CCMC

B-1 韓智 (カンチ) / Han Zhi

「乙女座 / Virgo」 (演奏: 高野大夢)

作品解説: 本作品の主人公は12星座の1つである乙女座の少女であり、彼女が環境や状況に対してリアクションをした音をイメージした。平穏と不安の間を繰り返し、テンションを生む心理状態を音響として描写した。乙女座の特徴のように、実は敏感な人々の豊かな内面世界と現実世界の音を組み合わせて、それらの対比を表現したい。言語化されていないボーカルと、金属や水などの物体が発する音を録音して音響素材とした。Granular Synthesisでボーカルを加えて密度を整え、特徴的な声を繰り返し、GRM Toolsの「Reson」で周波数帯域を調整した。また、金属音や犬の鳴き声のような鋭い音を心理的に変換するために、「Grinder」で粉状の音色に変形し心理状態を描写している。また、水流の音を複数の周波数帯域で分離し、「Doppler」を用いて没入感を高めるように空間処理を施した。

プロフィール: 韓智 (Han Zhi) 中国貴州省出身。四川音楽学院にてポピュラー音楽を学び、成績優秀者として卒業した。洗足学園音楽大学音楽・音響デザインコースの大学院二年生在籍、森研究室で電子音響音楽について研究している。森威功、Marty Hicks、生形三郎各氏を師事して、オーディオ技術、音響学、空間処理技術、音楽プログラミング、録音技術、インタラクティブシステムなど、多方面にわたるコンピュータ音楽の知識と技術を習得した。研究と創作活動を通じて、音響合成と動的な空間処理を駆使して常に新たな表現方法と技術の探求に努めている。

B-2 ヨウ シイ / Yang Ziwei

「Echoing Cities / 響の都市」

作品解説：「Echoing Cities」は、2つの都市のそれぞれの特徴的な音を使用している。そのうちの 하나가、私が今住んでいる東京の音で、そのほとんどは渋谷の中心と浅草寺周辺で録音された。渋谷スクランブル交差点では、さまざまな国の言葉が聞こえ、広告の音や電車の走る音、ぎっしりと詰まった人の群れ、ライトアップされた街並みなどを見ることができる。しかし、その裏には、手押し車や換気扇、電話ボックスでの会話やボタンを押す音などもある。浅草寺では、竹製の風鈴の音、竹箒で掃く音、周辺の商店の呼び売りの声が聞こえた。私はこのクリーンで繊細な音が好きで、この賑やかな街から発せられることに驚いた。もう一つの都市は私の出生地でもある中国湖南省株洲市である。高速鉄道のアナウンス、歩行者天国の金属音、祖父母の挨拶、料理の音などを帰国したときに録音した。2つの都市の風景と音の風景は非常に異なっている。東京の音は大きく、賑やかなのに比べ、株洲の音はより繊細で具象的だ。これらの音が織りなすコントラストを通して、豊かで立体的なサウンドスケープを描き、異なる視点から両都市の音楽を作りたいと思った。

プロフィール：中国湖南省出身。星海音楽学院学部音楽テクノロジー専攻卒業、洗足学園音楽大学大学修士課程作曲専攻在学中。第二回中国大学生音楽イノベーションコンクール・音楽マスメディア部門第1位 第四回中国大学生音楽イノベーションコンクール・音楽マスメディア部門第2位 第十三回中国大学生コンピュータデザインコンクール・コンピュータ音楽部門受賞 2024・杭州国際電子音楽作曲コンクール・Acousmatic/Electro-acoustic Music 部門受賞 2024・杭州国際電子音楽作曲コンクール・AI Songwriting Competition 部門入選 2023・杭州国際電子音楽作曲コンクール・Live Electronic Music 部門入選

B-3 楊萬可(ヨウ マンカ) / Yang Wanke

「口技 / Vocal mimicry」

作品解説：本作品「口技」は、中国の伝統芸能である「口技」から着想を得た音響作品である。「口技」とは、口や喉を駆使してあらゆる音を模倣し、観客に異なる場面や情景を感じさせる古典的なパフォーマンスであり、特に空間や時間の変化を音だけで表現する高度な技法が特徴である。この作品では、口笛や舌打ち音、無意味な発声といった日常的な音を素材として収録し、Ableton Live と GRM Tools、Max/MSP を使用して加工することで、現代の電子音楽における「口技」の新たな形を試みた。具体的な音の場面の設計において、伝統的な「口技」における、道具や音を通じて観客に場面や時間の変化を提示する技法を参考にしている。たとえば、口笛や唇を弾く音を源として、これらを加工・変化させることで異なる空間の切り替えや時間の推移を表現している。素材としての音の選定には、音響的な近さと遠さ、音の密度などに工夫を凝らし、伝統的な「口技」の持つ空間の深みと現代音楽ならではの立体的な音響感を両立させることを目指した。本作品は5分間にわたり、静寂から雑音、緊張から解放へと、さまざまな音の変化を通じて、聴衆を異なる情景や空間へと誘う。また、音響の粒子化や共鳴、回響などの技術を駆使し、空間の奥行きと時間の流れを感じさせる表現を目指している。こうしたプロセスを通して、電子音響としての「口技」を体現し、伝統と現代の融合を図った作品である。

プロフィール：洗足学園音楽大学音楽音響デザイン専攻大学院1年生。在学中、森威功教授に師事し、インタラクティブアートと電子音響音楽制作を学んでいる。

B-4 テイ コクトウ / Ding Guodong

「不忍池の春」

作品解説：不忍池の動物と自然景色をイメージにして、自然の風景が季節や時間によって変化する様子を音響合成とサウンド編集を通じて表現し、詩的な気持ちを味わえる作品として仕上げるために作りました。

プロフィール：2019年6月山東大学芸術学部音楽科中国民族打楽器専攻から卒業し、今は洗足学園音楽大学大学院の音楽音響デザインコースの院一年生として研究と勉強をしています。

B-5 王馨田 (オウ ケイデン) / Wang Xintian

「白昼夢 / Daydream」 (演奏：大久保雅基)

作品解説：この作品は、様々なサンプリングした音素材や電子音を短縮および伸長、短縮、逆再生、移調などをして再構成しています。様々な種類のエフェクターを使用して、サウンドの変形効果を実現しています。作品は白昼夢をテーマとして、大体4つの部分に分かれています。0秒から38秒までは導入部分であり、自己の夢境意識に入り込んだ状態を表現しています。39秒から1分20秒まででは、霧のような音や細かい粒子状の音素材を主に使用し、自分の空間を旅するような状態やシーンを表現しました。1分21秒から3分17秒までは、線条的な音素材を多用し、水や人の声を主体にしています。音響の主要な周波数帯が低域から高域へと遷移し、段落の終わりでクライマックスに達します。このセクションでは、主人公が水に落ちて全身が包まれる感覚を演出しています。3分18秒から4分5秒まではエピローグ部分であり、大部分の低域を取り除き、たくさんの高域を使用して、自己の思考が現実へと戻り、日が高く昇った情景を表現しました。

プロフィール：23歳です。浙江音楽学院学部音楽デザイン専攻から卒業した。今、尚美学園大学大学院で音楽創作専攻を勉強しています。学部の時、ダニー賞国際電子音楽コンテストのゲーム音楽部門で優秀賞を受賞したことがあります。

B-6 程玥媛 (テイ ゲツエン) / Cheng Yueyuan

「電気遊園地 / Denki Yuenchi (Parc d'amusement électrique)」

作品解説：「電気遊園地」は、日常に溢れる電気製品や金属音を素材に、それらを遊園地の幻想的な音として再構築した作品である。普段何気なく耳にする音に潜むリズムや感情を捉え、聴覚的な冒険へと変換している。日常的な音と非日常的な遊園地が対比され、そこに新しい視点が生まれる。この作品は、無意識に聞き流される音を意識的に再構成し、音の重なりや変容によって視覚的なイメージを喚起することを目的としている。現実の音が持つ感覚や記憶が、作品の中で遊園地の一部となり、日常と非日常の境界が曖昧になっていく。作品は三つのセクションに分かれており、それぞれが音楽的な旅を描いている。セクションA: 電気遊園地の入り口 セクションB: アトラクションの冒険 セクションA': 遊園地の幻想 この作品では、日常の音をノイズとしてではなく、感情や幻想を引き出す素材として扱い、音のレイヤーを重ねることで、日常の中に潜む非日常的な美を感じさせることが狙いだ。

プロフィール：5歳からピアノを学び、15歳で作曲に出会って以来、音楽への情熱を育んできた。武漢音楽学院を退学後も音楽への夢を追い続け、日本国立音楽大学や昭和音楽大学でコンピュータ音楽を専攻し、専門的な知識と技術を習得。電子音楽の制作に精通し、Max8ソフトを駆使して舞台照明、映像、PAなど多岐にわたる技術を習得している。Sonic interactionへの参加や論文執筆を通して、インタラクティブ・マルチメディア作品における音声と映像のインタラクションを研究。長年の音楽創作経験を持ち、音楽制作から舞台演出まで独立して遂行可能な組織調整能力を備える。

15:30～ K123

公募入選コンサート C / Concert C Works selected by CCMC

C-1 小川拓人 / Ogawa Takuto

「生きる」

作品解説：この曲は、私の人生の今までをそのまま音楽にしました。人生にいくつもの転機があり、それぞれの場面に印象的な音がありました。この作品を作るにあたり、その音を思い出しながら作り上げました。大きく分けて、誕生、幼少期、海外生活、闘病、音楽への目覚め、受験期に分かれています。当時、聞こえてきた音はもちろん、自分の心の内面であった音も作品の中で形にしました。この作品を通して、改めて生きていることを感じてほしいと思います。

プロフィール：父親の影響で、高校時代に作曲を開始。独学で作曲について学び、予備校時代、校舎のロビーで使用されるBGMを作曲したことをきっかけにBGMの制作をメインに行うようになる。大学で映像制作を主な事業とする法人を設立し、主に動画のBGMなどの作曲を行っている。CMやPR動画のBGMの制作や、大学広報の動画で使用されるBGMなどを制作している。

C-2 大金駿介 / Ogane Shunsuke

「Celestial Sphere」

作品解説：この作品は地球からのみ観測し得る宇宙を描いた作品である。「Celestial Sphere(天球)」という題名にもある通り、かつて地上から宇宙を想像するしかなかった人類が、飽くなき探究心で空を見つめ、どのように宇宙を解釈してきたかを示唆的に表現した。全ての生命の源であるにもかかわらず、私たちから最も遠く未知である宇宙というものに向き合い制作した。

プロフィール：山梨大学教育学部芸術身体教育コース音楽教育系に在学。7歳よりピアノを始める。高校では吹奏楽部にて打楽器を担当。学部2年の授業でコンピュータ音楽に触れ、楽曲制作を開始。CCMC2023入選。

C-3 秋山惟風 / Akiyama Ibuki

「走馬灯/Last flash back」

作品解説：走馬灯とは人が死ぬ間際に、これまでの人生の記憶がよみがえることをいう。その光景を音楽で表したいと考えた。走馬灯は本来ならば一瞬で過ぎ去ってしまう時間であるのに、長い時間が流れていくように感じる。これは音楽の時間を支配する力と共通するものがあるのではないかと考え、このテーマで音楽を制作した。ジャンナーの法則で知られる通り人生の体感時間は年を増すごとに短くなっていく。つまり、走馬灯でよみがえる記憶は子どものころや学生時代の思い出が比較的多くフラッシュバックするのではないかと考え、使用する素材を工夫した。最後の展開にも注目しながら聴いていただきたい。

プロフィール：11歳のころから作曲を始め、Midi音楽を中心に作曲を行っていた。初めて作った作品は「ピヨピヨ大冒険」。山梨大学教育学部芸術身体教育コースにおいて作曲、チューバを中心に学んでおり、第10回K作曲コンクール予選通過(本選審査中)、山梨県管打楽器ソロコンテストにおいて中学生部門第1位、高校生部門第3位、大学・一般部門第1位を受賞している。チューバを小林健、宮内純、大内邦靖、作曲を藤原嘉文、河野久寿、吉原太郎各氏に師事。

C-4 花澤昂 / Hanazawa Subaru

「夢」 (演奏：檜垣智也)

作品解説：シンプルに、夢。将来実現させたいと思っている事柄の方の、あこがれの方の夢ではなく、睡眠時に見る方の夢である。個人的に夢の簡単なメモをまとめるのが好きで、その中から自分の経験をもとに、学生時代のもの・非常に頻繁に見る高所から落下するもの・空想のもの(これは不思議な表現だが……夢とは空想である)などの夢空間の再現を試みた。空間の他にも、睡魔が襲ってきたときに体がカクッと動いてしまう現象(入眠時ミオクローヌスと呼ばれるものらしい)や、夢の中で感じる息苦しさをこの空想の作品から感じ取れたら幸いだ。一部、音飛びのように聴こえる音やノイズが収録されていますが、作者の意図通りの表現であり、ミスではありません。

プロフィール：尚美学園大学芸術情報学部音楽応用学科卒業。在学中、宮木朝子氏の元で楽曲制作およびアコースティック演奏を学ぶ。現在、フリーランスとして主に電子音楽制作からミックスダウン、MA、効果音制作等の分野で活動中。CCMC2022において、FUTURA賞を受賞。

C-5 守谷悠吾 / Moriya Yugo

「イメージの翼」

作品解説：私は空を飛ぶことを想像する。大空を切って、風をあびて、雲とたわむれ、鳥とたわむれ、地上を見下ろし、大きな地平線を眺める。そして思い出す。ジョン・キーツの詩、香月泰男の空、宮崎駿の地平線を。これら全てのイメージは氾濫し、散逸しながらも、やがて私にイメージの翼を形成させ私は飛翔する。以下、寺山修司の言葉を引用する。どんな鳥も想像力よりも高く飛べる鳥はいない。人間に与えられた能力の中で、一番素晴らしいものは想像力である。

そして、想像力によって高く飛翔したもう一人の私は、元の私を見下ろす。この作品は人が遠くの場所を想像する時に現れる、もう一人の私の存在を露わにする。

プロフィール：002年生まれ、神奈川県出身。電子音響音楽の作曲やハウリングの原理を利用し竹を素材にして製作したFeedback Organという自作楽器を使用し、ライブパフォーマンスを行う。2024年『落ちてゆく』がContemporary Computer Music Concert 2024 Motus賞を受賞、Festival FUTURA2024(フランス)にて上演。

C-6 田中敬一 / Tanaka Keiichi

「molting stage/脱皮期」

作品解説：molting stage / 脱皮期 は、昆虫の脱皮だけでなく、精神的成長や時代の変化、それに伴う殻を破る痛みや葛藤、そしてその先に待つ新しい自分の発見をテーマに、自己変革の過程を描いています。時代が移り変わる中で、私たちが何を手放し、何を新たに取り入れていくのか、その選択と成長を音楽で表現したサウンドトラックです。

"Molting Stage" is a track that not only represents an insect's molting but also embodies personal growth and the shifts of the era. It explores the pain and struggle of breaking free from old confines to discover a new self. This music serves as a soundtrack for those navigating what to release and what to embrace as we evolve in times of change.

プロフィール：多摩美術大学デザイン科卒、秋山邦晴の現代音楽論受講。音楽受賞歴：SAIF2014 シルバーアワード受賞、JSPA SOUND & SONG CONTEST 2020 大賞、CCMC2022 MOTUS賞。

16:30～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 4 / Acousmatic Music Live Concert 4

4-1 岡本久 / Okamoto Hisashi

「風の奏 / Kaze no Uta (the sound of the wind)」

作品解説：風は様々なものを使い音楽を奏でます。木や水、火や土などの自然系はもとより、建物や造形物、電線や戸の隙間などの人工物など、なんでも楽器にして奏でます。とりわけ神社の境内にかかるたくさんの絵馬を使い、それはそれは見事な歌を披露してくれます。この曲はそうした風の奏（うた）とともに、風の運ぶ様々なものによる奏（うた）を集め作りしました。

プロフィール：大阪芸術大学芸術学部音楽学科作曲専攻卒業。作曲を原嘉壽子氏、七ッ矢博資氏に師事。和声法、対位法をサルバトーレ・ニコロシ氏に師事。作曲や編曲、コンピュータ音楽をはじめオリジナル電子楽器製作、若手の育成など様々な活動を行っている。また音環境研究として、特に様々な里地里山地域の音の記録を行い、その特徴などの分析研究を行っている。関西国際大学教授、大阪芸術大学非常勤講師。音と音楽・創作工房 116 (ACSM116) 運営委員、神戸市音楽家協会会員、日本騒音制御工学会会員、日本サウンドスケープ協会会員等。

4-2 林恭平 / Hayashi Kyohei

「THE KARAOKE」

作品解説：まず、今回の CCMC のポスターに目をやるとそこには「多様性豊かなアコースマティック音楽の現在」の文字がありました。今の世は「多様性、多様性」と兎に角いわれているが、真の多様性とは果たして一体何であるか？私は、その事を第一に念頭に置いてこの『The Karaoke』を作曲しました……。カラオケという名称は、空のオーケストラの事からきている。空とは虚の事でもある。我々は現在、とても空虚な時代に生きている。カラオケという日本を代表する文化を通して、現代日本の文化現状を逆照射した、正に多様性豊かな電子音響音楽作品になります。更に解説を付け足すならば、これこそ真にノイズ（雑音）・ミュージックだといえるだろう。

プロフィール：電子音響/映像作家。1984年福井県で生まれ兵庫県三田市で育つ。大阪芸術大学大学院作曲コースにて、七ッ矢博資、宇都宮泰、上原和夫、石上和也、檜垣智也に師事する。電子音響音楽を伴う映像作品の創作を行う。フランスにて1979年より続く伝統ある電子音楽コンクール、ルイジ・ルッソロ国際音楽コンクール (Prix Russolo) にて2015年に最優秀賞と第1位を同時受賞。日本代表の陪審員として2016年より任命され、更に2023年より取締役員のメンバーに選出される。Paris Festival for Different and Experimental Cinema. This 21st festival edition 優勝。Chicago Indie Film Awards Best Experimental 部門優勝。

4-3 長瀬元應 / Nagase Gen

「Fragments de lamentations / 嘆きにつまざる断章」

作品解説：2023年以降同じような方法で作品を遺している。仕事場の音や周囲の自然音をペーストしたり加工したり。半径の狭い世界には変わりないか。終わりの近い誰かが、今に対して、嘆いている……ただそれだけ。健康状態は勿論、経済面や時間の面など色々な制約があり、今後大きな作品にまとめられるかどうかかわからないが、今回も何かの一部、断章として想定してみた。演奏時間およそ8分。

プロフィール：1963年東京生まれ。学習院大学仏文学科在学時に個人レッスンで作曲を有馬禮子氏、音楽史・音楽学を西原稔氏に師事。音楽・芸術関係の編集記者に従事したのち2003年CCMC夏期アトリエ参加。2010年以降「長瀬元應/Gen0Nagase」名義で電子音楽作品を発表。CCMCコンサート、11、12、14年富士電子音響芸術音楽祭 (FAF)、15年 FAF ANNEX FUJINOMIYA に出展。甲状腺の自己免疫疾患に伴う糖尿病、眼病で活動休止していたがCCMC2022から復帰。

4-4 岡田智則 / Okada Tomonori

「古代都市 / Ancient Capital」

作品解説：GRM (Groupe Recherche de la musique concrète) メンバーの1人であったシュトックハウゼンは、「暗越奈良街道」を通して奈良の東大寺を観光し、雅楽の演奏やお水取りの音など録音して2台のピアノとエレクトロニクスのための「マントラ」を作曲した。シュトックハウゼンが行ったプロセスを私自身も踏んでみたいと考え、自転車に乗って「暗越奈良街道」を進み、生駒山で聴こえてくる自然の音や東大寺に訪れている修学旅行生の話し声を録音した。修学旅行に訪れている子供達の会話を聴いていると、1つの歌声が鳴り響いているように感じた。本作品では、修学旅行生の会話を主な素材音として使用し、歌として聴こえるように編集した音を作り上げている。

プロフィール：広島出身。現代音楽作曲家。アコースモニウム奏者。これまでに自主公演企画を「公益財団法人全国税理士共栄会文化財団」や「公益財団法人朝日新聞文化財団」など、多くの助成団体に採択され演奏会を実施。エレクトロニクスを用いた地域活性化事業や電子技術を使用した現代音楽の普及活動を行っている。また、美術家と共同制作により、コンサートにおいて音楽以外の芸術作品を上演。テクノロジーを使用した音楽表現の発展にも力を入れている。「CCMC2017」Futura 賞入賞。「Prix Presque Rien2017」入選。「FESTIVAL FUTURA」をはじめ、国内外の音楽祭にて電子音楽作品が上演・展示。長久手市長賞受賞。2019年「愛知県立芸術大学ポピュラー・クラシック・コンサート」にて、2管編成のオーケストラ作品『ヤマタノオロチ』が世界初演される。ミクスト音楽演奏のための研究にも取り組み、「第125回日本音楽学会中部支部定例研究会」や「先端芸術音楽創作学会」で研究報告を行っている。

4-5 牛山泰良 / Ushiyama Taira

「鳴動するは打物」

作品解説：本作はドラムスやガムラン、様々な打つ音を主に使用し制作されている。これらの音は時にはそのまま、時には原型も無くなる程に加工されて提示される。各部の主旋律的に用いられる音はバラバラではあるが元は打つ音である。また定位は時に規則正しく、時に不安定に配置されている。この様に常に変化する打つ音からなる本作のタイトルを「鳴動するは打物」と名付けた。

プロフィール：1989年12月長野県諏訪市に生まれる。電子音楽、サウンドアート作家、音響エンジニアと活動は多岐にわたる。エリザベト音楽大学、京都精華大学、相愛大学、帝塚山学院大学非常勤講師。2014年に仲間と共に電子音楽カンパニー「hirvi」を立ち上げ、電子音楽のワークショップやコンサートを企画・運営している。創作においては伝統と前衛、音と空間を内包した創作を目指す。

17:30～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 5 / Acousmatic Music Live Concert 5

5-1 檜垣智也 / Higaki Tomonari

「音楽の石 / Pierre musicale」

作品解説：本作はフランスの詩人、医師のヴィクトル・セガレン Victor Segalen(1878-1919)の詩「音楽の石 Pierre musicale」(詩集『碑 Stèles』(1912)に収録)に基づいている。とはいうものの、音楽は詩の気分や情景を強調・説明するわけではなく、あえてそれらを併置させ節度ある距離をとる。わたしはその間から偶然現われ出る詩的世界に期待している。なお本作の日本語訳は有田忠郎氏のものによった。また朗読を太田真希、ギターを山田岳の両氏の協力を得た。

プロフィール：作曲家、アコースモニウム。アコースマティックの可能性を追求。世界中のアコースモニウムで演奏し、リサイタル活動は高く評価されている。近作はサウンド・オペラ「石巻ハ、ハジメテノ、紙ノ声、……」(詩人・吉増剛造、映画監督・七里圭との共同制作)。INA-GRM、Motus、Alcôme、Futura 音楽祭(以上フランス)、ハーバード大学、ケルン大学、M.ar.e(イタリア)など世界中のアコースモニウムを演奏。第5回国際リュック・フェラーリ・コンクール最高賞(2003)、第18回文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品(2014)、大阪文化祭奨励賞(2022)など受賞、入選多数。ボンクリ・フェス(東京芸術劇場)では電子音楽の部屋を監修。M&R 国際空間演奏コンクール審査員。愛知県立芸術大学大学院修了。博士(芸術工学、九州大学)。東海大学准教授、大阪芸術大学大学院客員教授。Futura 音楽祭講師。

5-2 大塚勇樹 / Ohtsuka Yuki

「Fragmentary Passage (refrain)」

作品解説：自身の心身の分断を補完するための作品群「Fragmentary passage」の9作目。寄せては返す波の音、反復しているようで実際は絶えず生成され続けるグリッチ的な具体音、反復を飛び越えて鳴り続けるドローン。「refrain」という言葉には「繰り返し」以外にも「差し控える」という意味合いもあるそうだが、自分の何を控えて何を出していくのかという二分的な悩みは常につきまとう。音楽を繰り返し作曲し演奏し続ける中でそういういったものを乗り越えられたらと思うが、果たして。

プロフィール：京都府出身の音楽家、サウンドエンジニア。大阪芸術大学にて電子音響音楽の作曲および多層化立体音響システム「アコースモニウム」演奏を学び、同大学院博士（前期）課程を修了。また、2012年にフランスで開催されたアコースモニウムの演奏講習会を受講。CCMC 2011では佳作、同20212ではMOTUS賞を受賞している。現在では主にMolecule Plane名義で活動しており、アコースモニウムの演奏経験などを活かしつつ、モジュラーシンセサイザーやノイズマシン、フィールドレコーディングなどの音を素材として持続的な音色として標本化し、それらを多数レイヤーすることによって生じる複雑な不協和や位相変化、空間密度などをコントロールしながら、聴覚体験のみで視覚的なイメージや記憶を喚起させるような作品制作とライブを行う。これまでに『Acousticophilia』(2016)、『SCHEMATIC』(2017)、『Apocrypha』(2022)という3枚のCDアルバムを発表するほか、配信限定のEPやライブレコーディングアルバム、『a sign 2』(2020)、『MEDIUM AMBIENT COLLECTION 2022』(2022)といったコンピレーションアルバムへの参加やリミックスなどリリースは多岐に渡っており、瀬戸内国際芸術祭、奈良・町家の芸術祭はならあと、KYOTO EXPERIMENT、ボンクリ・フェスなど多数の芸術祭や音楽祭への出演や、FUTURA（仏）、SILENCE（伊）といったヨーロッパの電子音響音楽のフェスティバルでも作品がたびたび上演されている。マスタリングエンジニアとして福岡創（ex. P-MODEL）、檜垣智也、テンテンコ、Merzbow、人間石鹸などの作品を手掛けているほか、レコーディングやミキシング、アコースモニウムやモジュラーシンセサイザーのワークショップ講師、執筆、エレクトロニクスを用いたコンサートの音響技術、企業や映像作品への楽曲・効果音提供、機材コンサルティングなど広範囲で活動している。https://linktr.ee/push_it_studio

5-3 渡邊裕美 / Watanabe Hiromi

「Larmes d'Astrée / アストライアの涙」

作品解説：アストライアは正義と純潔の女神であり、ゼウスの娘であるとも言われている。かつて人間が善良で争いのない時代に、地上で人々と共に暮らしていましたが、人間が墮落し、戦争や暴力が支配するようになると、彼女は人間の世界に絶望し、天に去って星座になったとされている。作品では、アストライアの喪失した理想や、天上と地上の断絶、星々に残る涙のきらめきを音で表現している。チカチカとした高周波の粒は夜空に降る涙や光の断片を、残響が深く響く音は地上への未練や喪失感を意味する。

プロフィール：静岡県出身。東京藝術大学大学院音楽学専攻修士課程修了後、渡仏。パンタン県立音楽院にて審査員満場一致の最優秀で電子音響音楽のDEMを取得、同時にSACEMから奨学金が授与される。ジャン・モネ大学サン＝テティエンス校コンピュータ音楽専門職修士課程修了。繊細な色彩の移ろいが生み出す仮想の音響空間を求めて音楽制作を続けている。近年は幾何学曲線を用いた音の空間投影のコントロール、および音楽と映像、身体表現の連関などに関心を抱いている。

主な受賞歴はMusica Nova 2017 ミクスト部門第1位、CCMC 2011にてACSM116賞受賞。またINA-GRM主催Banc d'essai 2013、NYCEMF 2016、ICMC 2016に作品入選。現在は名古屋市立大学大学院芸術工学研究科研究員、および京都市立芸術大学非常勤講師。hiromiwatanabe.com

5-4 田代啓希 / Tashiro Hiroki

「ななつ星」

作品解説：この作品は「北斗七星」の別称である「ななつ星」から着想を得て制作された電子音響音楽作品である。それぞれ1分から2分程度のシンプルな七つの小品で構成されており、軸となる音色と技法は小品ごとに異なっている。北斗七星はおおぐま座の腰から尻尾を構成する七つの明るい星の星列で、「ななつ星」と呼ばれることもある。それぞれの星が十分に明るい星であるため目立ちやすく、世界各地で様々な伝承や事物が存在する。聴き手には七つの星からお気に入りの星を見つけてもらい、一つ一つの星（小品）が見せる情景を自由にイメージしてほしい。-各小品の曲名- 01 - Clock 02 - Distortion 03 - Filter 04 - Aqua 05 - Mono 06 - Trains 07 - Drone

プロフィール：神戸市出身。電子音楽家、サウンドエンジニア、ビデオグラファーなど活動は多岐にわたる。創作者としては電子音響音楽の作曲・演奏を主な活動フィールドとして、「自由なイメージを想起できる音」をテーマに作品制作に取り組む。技術者としては音響・映像を双方の知識を活かしてサウンドエンジニア・ビデオグラファーとしても活動しており、音響関連のみならず、コンサート撮影やPV制作などに従事。両分野のテクニカルサポートも行っている。これまでに、CCMC(2016-2024 東京/京都)FESTIVAL FUTURA (2019,2020,2024 仏)、ボンクリ・フェス(2019-2023 東京)などで作品を上演。CCMC2019にてFUTURA賞、2020にてMOTUS賞を受賞。大阪芸術大学大学院博士課程前期芸術研究科芸術制作専攻作曲研究領域(電子音楽)修了。現在、京都精華大学メディア表現学部非常勤講師。

5-5 葛西聖憲 / Kasai Masanori

「Étude 2025」

作品解説：ピアノ、呼び鈴、オルゴールの音を使って創作。

これらいずれの音も、打弦したり金属を叩いたりはいじたりして、単純に振動が減衰する音素材。

しかし、当然のことではあるが、その音素材をリバースさせることにより振動が増幅する。

これはある意味、バック・トゥ・ザ・フューチャーである。

プロフィール：現在、同志社女子大学学芸学部音楽学科特任教授。

5-6 ドニ・デュフル / Denis Dufour

「L'Ivre d'avril op. 121 / 四月の酔い op. 121」 [2002] 04'10

Cycle Les Acousmalides より (演奏：檜垣智也)

作品解説：IMEB（ブルジュ）の Synthèse フェスティバルから公開作品「Les Saisons」の依頼を受けて、パリ 10 区の作曲家のスタジオにて作曲。

録音：ドニ・デュフル

声：セバスチアン・エヴァンス Sebastian Evans

テキスト：トマ・ブランド

初演は 2002 年 6 月 4 日、ブルジュのジャック・クール劇場にて、ブルジュ電子音響音楽研究所の第 32 回 Synthèse 2002 フェスティバルで行われた。

「La terre est ronde」の制作中に作曲されたこの「Les Acousmalides」シリーズの第 6 曲で、ドニ・デュフルは、土の原始的な樹液をとらえ、草と泥に満ちたりトルネロを誕生させた。

すべてのリトルネロが春を導くことはないにせよ、まるでイスマイ・カダレの著書「Avril Brisé」と呼応するかのよう。 (トマ・ブランド)

「Treffpunkt op. 193 / 待ち合わせ場所」 [2024, création] 09'09

Cycle Les Acousmalides より (演奏：檜垣智也)

作品解説：トマ・ブランドとブランディヴィにある作曲家のスタジオ共同で作曲。

録音：ドニ・デュフル

声：ラファエル・ヴィレンブロック

テキスト：トマ・ブランド

1988 年の作品のサブタイトルは、詩「Rendez-vous」からの引用である。「Douze mélodies acoustiques」の要素を、新しいサイクル「Les Acousmalides」に応用している。

1980 年から 1987 年にかけて作曲した言葉のないメロディーが、ここで、当時のインスピレーションを与えてくれたテキストに立ち返る。(ジェローム・ニロン)

プロフィール：ドニ・デュフルは、音に対する形態学的、表現的アプローチの先駆者の一人である。器楽とアコースマティック・アートの両分野で著名なサウンド・クリエイターとなった。アコースマティック・アートでは、これまでに 200 作品を作曲。1976 年から 2021 年まで、パリのコンセルバトワールで教鞭をとる。パリ、ペルピニャン、リヨンの音楽院で教鞭をとる傍ら、研究者、講師、コンサルタントとしてセミナー、ワークショップ、マスタークラスに携わる。また教育者として、特にフランス、イタリア、日本におけるアコースマティック・アートの発展に重要な役割を果たしている。GRM のメンバー (1977 年～2000 年) として、分析ツールの開発と「リアルタイム」の実践に貢献した。1978 年以降はエレクトロニクスの分野で、1984 年以降はコンピュータ音楽の分野で活躍する。現代音楽における数多くのイベントの企画者や芸術監督を務める。音楽界に影響を与え続けているいくつかの組織、集団、楽器グループの創始者でもある。現在、ブルターニュのモルビアンに住み、文化とウェルビーイングのためのセンターの建設に取り組んでいる。器楽、声楽、ミクスト、ライブ・エレクトロニクスなど、「リアルタイム」とフィクスとメディア作品はメゾン ONA から CD 出版されている。

www.denisdufour.fr www.maison-ona.com/composer-Dufour www.abbayedelanvaux.fr

両日

インスタレーション / Installation

1. 岡本久 / Okamoto Hisashi

「Installation - 202503」

解説：かねてよりマイコンをベースとした音や光などのコントローラー、様々な事象などに応じ様々に連携・変容するインスタレーション作品の製作を進めています。ひとつひとつの装置はできる限り単純なものとし、それらがいろいろな形で組み合わせることで複雑に、あるいは置かれた状況に最適な形で展開できるような柔軟性・発展性のある作品構成を取っています。それぞれの装置は時に Wifi や Bluetooth などの無線を使い、装置のいづれかがサーバー、あるいはクライアント的な役割を「演じる」ようにしています。まだまだ試験段階にとどまっているため、今のところ作品に特定の名前がなく、また現地で設置の段階で最終的な形が決まるため、タイトルは発表年月をつけただけのものにとどめています。

プロフィール：大阪芸術大学芸術学部音楽学科作曲専攻卒業。作曲を原嘉壽子氏、セツ矢博資氏に師事。和声法、対位法をサルバトーレ・ニコローシ氏に師事。作曲や編曲、コンピュータ音楽をはじめオリジナル電子楽器製作、若手の育成など様々な活動を行っている。また音環境研究として、特に様々な里地里山地域の音の記録を行い、その特徴などの分析研究を行っている。関西国際大学教授、大阪芸術大学非常勤講師。音と音楽・創作工房 116 (ACSM116) 運営委員、神戸市音楽家協会会員、日本騒音制御工学会会員、日本サウンドスケープ協会会員等。

2. 平野砂峰旅 / Hirano Saburo

「Atmospheric Sound」

解説：Atmospheric Sound は、マイクロホン、ラウドスピーカ、PC を用いたサウンドインスタレーション作品です。展示空間の音をマイクロホンで集音し、ラウドスピーカから出力することでハウリングを発生させます。普通、ハウリング音は忌み嫌われる音ですが、ラウドスピーカとマイクの間でPCで音を加工することで、魅力的なハウリング音を作り出す試みです。スピーカは複数設置されていますので、場所によって音の聞こえ方が変化します。また、マイクロホンの近くで、喋ったり、モノ音を出しても面白い音が聞こえると思います。

プロフィール：京都精華大学メディア表現学部/芸術研究科教授。サウンドインスタレーションやメディアインスタレーションを制作すると同時に、ビデオアーティスト、メディアアーティストやCG作家とのコラボレーションも多い。近年は、音と映像のインタラクションをテーマにインスタレーションやパフォーマンス作品を制作。ISEA, ICMC, NIME などの国際会議で作品、論文を発表。サウンドトラック制作を手がけた映像作品も国内外で受賞多数。近年は、日本庭園など屋外での立体音響のサウンドデザインも手掛ける。

3. 電子音響ピープルプロジェクト / Denshi Onkyo People Project

「Denshi Onkyo People Project 2023-2024 Report」

解説：電子音響ピープルプロジェクトは、電子音響音楽を未経験の人々と共有することを目的とした参加型アートプロジェクトで、創作ワークショップとその事後にプロの作曲家と参加者が共同して作品を制作することを柱とし、その過程やそこから生まれる関係性を重要視しています。コンピュータの発展によって創作はより身近なものとなりましたが、電子音響音楽は依然として「難解」と見なされ、一部の専門家によってのみ創作されている傾向がありますが、このプロジェクトでは、参加した多くの人々が創作を楽しむ姿が観察されています。2023年から2024年にかけては、ゲーテ・インスティテュート東京やBankART Stationなどでワークショップを実施し、2024年9月にはZKM、10月にはGoethe-Institut Tokyoでの公演が行われました。これらの公演では、12の事後協働制作作品とプロ作曲家と学生の協働作品が披露されました。さらに、CCMC2025では、2023年から2024年のワークショップや公演の様子がスライドでご覧いただければ幸いです。

プロフィール：ワークショップ講師：■BankART Station & Goethe-Institut Tokyo：新井聡真、高野大夢、大野茉莉、渡辺愛、仲井朋子、由雄正恒、柴山拓郎／■Scenkonst Museet：Andre Holzapfel, Delek Holzer, Henrik Frisk, Takuro Shibayama／■Festival Futura：Vincent Laubeuf, Agnès Poisson, Kazuko Narita, Takuro Shibayama／■ZKM：Benjamin Miller, Hiromi Ishii, Ludger Brümmer, Takuro Shibayama

アクセス / Access 予約/Reservation

アクセス / Access : <https://www.dwc.doshisha.ac.jp/access>

プログラムは変更になる場合があります / Program is subject to change

入場無料 / Admission free

要予約 / Reservation required

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeobuynokpCzD2cQAs2-sZjb4BYcS_anl3Et2ybJKm8qk6E6Q/viewform?usp=header

詳細/For detail: <https://acsm116.com/ccmc-2/ccmc2022-and-over/ccmc2025/>

問い合わせ/Contact us : acsm116@gmail.com

@ 同志社女子大学京田辺キャンパス頌啓館 (〒610-0395 京都府京田辺市興戸)

@ Doshisha Women's College Kyotanabe Campus Shokeikan (〒610-0395 Kyotofu Kyotanabeshi Kodo)